



# CNEAS

Center for Northeast Asian Studies  
東北大学東北アジア研究センター



People and Publicity

Center for Northeast Asian Studies

Tohoku University

## センター長挨拶

東北アジア研究の課題の重心が大きく変わりつつあると感じている。従来その基軸は、ロシア・中国・日本などに跨がる環境問題の解決や経済交流を実現するための学際的知識を紡ぎ出すことにあった。今後は、この地域の過去と現在における対立・紛争・戦争の起源とその対応や解決への道筋というテーマが中心になるのではないかと思うのである。それは、諸研究分野の問題意識や方法はもちろんのこと、学際的の枠組みにまで及ぶのではないかと考えている。

その理由は、2022年のロシアのウクライナ侵略にはじまる「戦争」にある。この出来事によって、対立のグローバリズムへと世界は変わった。すでに構造的な変化の兆しはあったが、それが不可逆的なものであることを決定づけたと言っても良い。欧米諸国は厳しい制裁を課し、これにロシアが反発する構造ができあがっている。外交は無論のこと、経済交流や学術交流も大きく制限されているのが現状である。加えて世界各地での紛争の顕在化が連動している。

私がかかわっている北極研究はまさに冷戦崩壊によって可能となった学際科学であった。ソ連末期に、北極海環境問題解決のための国際的な協力のための制度とそれを支えるための科学委員会が整えられ、欧米諸国とロシアさらに日本や中国・インドなどが関わる体制ができたからである。これを基盤にして、その後、自然科学と人文・社会科学が共同し、気候変動の影響評価が行われるようになった。手前味噌になるが、フィールドを共有する文理連携研究の最も成功した例といえるかもしれない。しかし、2022年以降、北極は二つに分かれた。もはや従来

のような学術の国際協力体制を復活させることは想像困難な状況になってしまった。人文社会科学の優先研究課題は、二極化された北極の安全保障や政治社会的な領域に移りつつある。自然科学もロシア抜きで観測・解析をせざるをえず、従来の研究のあり方が変わっていかざるをえない。

翻って考えてみると、東北アジア研究センターは1996年に発足し、その始まりは冷戦崩壊後による旧ソ連との交流開始がきっかけであった。ある意味で北極研究と類似した歴史的背景を持っている。すでに2022年以前から、ロシアや中国は権威主義国家としての認識されるようになっており、隣国理解としての東北アジア研究ということが我々自身の課題にもなっていた。おそらく今後はこの地域の平和共存へ資する学際的知識を発掘していくことがより一層重要になっていくだろう。

東北アジア研究センターの強みは、人文科学・社会科学・自然科学の個々の専門分野において世界的に活躍する優れた研究者がいることだけでなく、彼らが文理を超えた学際的協力を実施してきたという点にある。この点は東北大学の中で我々の誇るべき点である。生物学と歴史学・考古学、人類学と水文学・地質学など枚挙にいとまがないが、その文理を含む学際的な研究成果は、国際的にも着目されている。こうした基盤のもとに、私たちは新しい東北アジア研究を発展させていかねばならないと思うのである。

センター長 高倉 浩樹



## 研究紹介

### ●ロシア・シベリア研究分野

寺山 恭輔 / TERAYAMA Kiyosuke (教授)

スターリンの作り上げた体制をより深く理解するため、干渉戦争の再来を懸念して彼が強い関心を寄せた1931年9月の満洲事変勃発後のソ連極東地方に対する様々な政策とそれらのソ連全土への影響を研究している。主な考察対象は、兵士・労働者や物資の輸送、シベリア鉄道の複線化やバム鉄道の建設等の動員力強化、軍需産業の構築、感染症撲滅のための衛生対策、気象観測網の拡大、通信網の構築、ラジオ網の構築による国内外に向けたプロパガンダ、食料の備蓄、全国民に対する軍事教育等、秘密裡に行われ未解明の様々な国防力強化策である。

J-GLOBAL : 200901070306910856

高倉 浩樹 / TAKAKURA Hiroki (教授)

ロシアを理解するためには、現在200近くの民族集団が暮らしていること、かつて中央アジア及びアラスカにまで広がる植民地を持っていた歴史を視野に入れなければならない。シベリアは、この点で現在においても内国植民地である。そこは、数多くの先住民が暮らす空間であると共に、豊富な天然資源を基盤にした経済開発が進行する地域だからである。筆者はシベリアのエスニシティ・ナショナリズムについて研究する一方で、人類史的視点を含む極北の文化生態史、さらに気候変動の影響評価などに取り組んでいる。

J-GLOBAL : 201501018786770477 ORCID : 0000-0002-1470-6173

バホモフ・オレグ / PAKHOMOV Oleg (助教)

社会的なヒステリー、大恐怖、集団的暴力のうねり、ある一定の条件の下で、新規の政治機関を歴史条件に適応させて組成する特別なメカニズムと

して機能し得る。社会文化的心理学に基づく、集団的精神病の現象は、集団／個人の行動を制御する外的メカニズムである集団的情緒の歪みの複合体として定義できる。現在取り組んでいるのは、ロシア国家の形成・経過について、集団情緒の歪みの一連のサイクルとしての分析である。ロシアの集団情緒の歪みの複合体は、16-17世紀にキリスト教的終末論に基づき最終的に形成された。基盤となるのが死との文化・心理的相互作用である。このような重要な政治制度の形成について、中央集権の官僚主義ヒエラルキーの形成、また民族国家の形成についても研究する。

ORCID : 0000-0003-2530-0854

### ●モンゴル・中央アジア研究分野

佐野 勝宏 / SANO Katsuhiko (教授)

人類の進化と石器の製作・使用体系の発達の関係について研究している。特に、人類の形質的な進化や認知能力の発達が、人類の道具作りや道具の使用方法にどのように影響したのかに注目している。現在は、ホモ・サピエンスだけが地球上のあらゆる地域に拡散して人口増加を実現したのに対し、旧人や原人等の先人類は絶滅してしまった背景をより良く理解するための調査研究に取り組んでいる。そのため、旧石器時代の食糧獲得において重要であった狩猟技術の発展に注目し、人類の進化と狩猟技術の発展の関係について調べている。

J-GLOBAL : 201001060985228975 ORCID : 0000-0002-0839-8549

柳田 賢二 / YANAGIDA Kenji (准教授)

世界のほとんどの地域は多民族からなる多言語社会である。国、民族、言語の境界は一致しない。言語は、複雑多様な形で人間にとって外的な社

会文化環境の一部となる。また他方、ある言語の母語話者にとって当たり前である区別が、他の言語の話者にとっては全く想定外の区別であることがいくらかである。しかも、母語における区別とは、ただ単に言語によって常にこれを強要されている恣意的なものであるにも拘わらず、それが言語による強要であると認識されない恐ろしい「内的環境」でもある。この外的環境、内的環境の両面から言語に関わる研究を行う。

J-GLOBAL: 200901067636472315

## ●中国研究分野

上野 稔弘 / UENO Toshihiro (准教授)

中国において漢民族以外の諸民族が多く分布する辺疆地域を主たる対象として、帝国体制の終焉でゆるやかな統合が解体されたこれらの地域が、国民国家建設により多民族国家中国の一部として領域的・人的に統合・再編される20世紀前半期の歴史的過程を研究している。世界各地の文書館などに所蔵されている関連文献資料の収集・分析を進めることで、今日の中国の民族問題につながる歴史的背景の解明にあたるとともに、それを通じて東北アジアの多民族社会に対する理解を一層深め、さらには東北アジアの民族共生に貢献することを目指す。

J-GLOBAL: 200901058049007317

石井 弓 / ISHII Yumi (准教授)

オーラルヒストリーによる中国人の戦争記憶の研究を行っている。日中戦争の最前線だった山西省孟県での調査によって、村人たちの戦争記憶(体験・非体験)を開き取り、地域や歴史との関連のなかで戦争の集合的記憶や記憶の世代間継承を分析してきた。並行して、同地域の雨乞い復活を調査し、地域コミュニティのレジリエンスや、コミュニティの人と人をつなぐ歴史物語(『趙氏孤児』)の役割について考察している。『趙氏孤児』が啓蒙期ヨーロッパで広く受容されたことから、中国(農村)と啓蒙期ヨーロッパの交流についても研究を進めている。

J-GLOBAL: 202301020100108975 ORCID: 0000-0001-7851-2231

## ●日本・朝鮮半島研究分野

石井 敦 / ISHII Atsushi (准教授)

専門は国際政治学・科学技術社会学、扱っている問題領域は越境大気汚染、漁業資源管理、捕鯨問題、気候工学である。現在、日本の環境外交の要因分析、うなぎの資源管理に関する超学際科学研究に従事している。特に、後者については、フォーカスグループインタビュー、ステークホルダー分析、レジームコンプレックス、国内資源管理政策の比較分析を行っている。学術活動としては、Frontiers in Climateのreview editorを務める。また、環境政治・ガバナンス研究会を主宰しており、常時、発表者を募集中である。近著は大久保彩子氏(東海大学)と共著の「Pursuing sustainability? Ecosystem considerations in Japan's fisheries governance」(Marine Policy誌、第152巻)である。

ORCID:0000-0002-3111-6626

デレーニ・アリン / DELANEY Alyne (教授)

私の研究は、沿岸地域に住む人々のアイデンティティ、幸福感、場所への愛着、文化遺産のなど、さまざまなテーマを通して、人々と環境とのつながりについて考えることである。海との環境的なつながりを調査する中で、漁業ガバナンスや、里海や「海業」といった新しい概念も取り上げてきた。私の研究は、儀式や祭り、オーラルヒストリーなど、人類学的な視点に立ったものであると同時に、自然科学者との学際的共同研究においては、社会科学を取り入れてもいる。社会的持続可能性と回復力に長年関心を寄せており、災害復興や気候変動に関する研究も行っている。

J-GLOBAL: 201901016827992100 ORCID: 0000-0002-0516-1343

程 永超 / CHENG Yongchao (准教授)

主に17~19世紀日本・朝鮮・中国三国関係史について研究している。壬辰戦争(1592~1598)後、日本・中国の間には国家間の正式な外交がなく、政治外交関係としては、かろうじて朝鮮王朝と琉球王国を介する希薄なものと考えられるようになった。私は朝鮮王朝を介した日本と中国の間接的な政治関係に着目し、中国・朝鮮・日本(幕府・対馬藩)の史料を比較検討しながら、東アジア国際関係史を再構築しようとしている。また、天文学者と協力して、歴史史料から過去の天文現象と気象現象を解明している最中である。

J-GLOBAL: 201801001730339504 ORCID: 0000-0001-9932-4029

宮本 毅 / MIYAMOTO Tsuyoshi (助教)

火山噴火が発生した場合には周辺地域に多大な災厄がもたらされる。東北アジア地域には複数の火山が存在するが、噴火が自然界(人類史)に与える影響を知るためこの地域において過去にどのような火山活動が行われてきたかを、日本、中国・北朝鮮において有史後に噴火したとされる火山を対象としている。特に10世紀に大陸と日本で同時期に発生した白頭山と十和田湖の2つの大規模噴火に焦点をあて、フィールド調査を通じて噴火の推移や、噴火がもたらした自然界への影響について検討している。

J-GLOBAL: 200901086699393851

## ●地域生態系研究分野

千葉 聡 / CHIBA Satoshi (教授)

私たちの研究室では、さまざまな空間的・時間的スケールで生物多様性が進化するプロセスを明らかにすることを目的として研究を進めている。特に、貝類、昆虫類、爬虫類、扁形動物などの生物群を対象として、フィールドワークや野外実験によるマクロな仕組みや、ゲノム解析により遺伝子レベルの仕組みの解明に努めている。生息する系統のユニークさと高い多様性により、世界的に高い進化的価値を持つことで知られる、日本を含む東北アジアの生物相の起源と保全のための研究に取り組んでいる。

J-GLOBAL: 200901099098503778 ORCID: 0000-0001-9273-0307

木村 一貴 / KIMURA Kazutaka (助教)

極東ロシアからベトナム・フィリピンにかけてのアジア地域は高い生物多様性を示すホットスポットの一つである。この地域の生物をモデルとし、生物多様性の創出・維持メカニズムについての研究を行っている。また、人新世

## 出版物紹介

### 『東北アジア研究』

東北アジア研究の発展に貢献することを目的とした査読制学術雑誌。1996年創刊。

第29号(2025年)目次

#### ●論文

オデッサからウラジオストクへ—1930年代前半のソ連の海上輸送

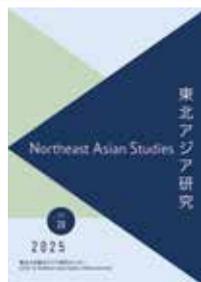
寺山恭輔

Visual Anthropology in the Environmental Inquiry: Possible Paths

PANÁKOVÁ Jaroslava

#### ●総説

中国における対日政策の言説空間—国際関係・日本研究機関誌を手掛かりに(2016-2023)— / 王広涛、俞佳儒、程兆語



#### ●研究ノート

徳之島恩納城遺跡出土青磁の幾何学的形態測定学的分析

谷津愛奈、榎本美里、佐野勝宏

The Saga of Three Chinese Chekists in the Soviet Political Police (EASI)

Jon K. Chang

#### ●資料 / 研究動向

中国における公訴時効(訴追時効)制度の運用実態の分析—「北大法意」で、2013年5月5日~2014年年末判決までの資料を素材として

高橋孝治

#### ●書評

谷本雅之『在来的発展と大都市—20世紀日本における中小経営の展開』名古屋:名古屋大学出版会、2024年、424頁 / 酒井一輔

程永超『華夷変遷の東アジア—近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究—』大阪:清文堂出版、2021年、382頁 / 米谷均

ともされるこの時代において、人為的な動植物の絶滅という悲劇は今後も数多く起こることが予想されるが、それを少しでも防止できるよう生態系保全の手法改善にも貢献したいと考えている。特に、人為的変化にさらされやすい沿岸域や淡水域の生物相の把握や絶滅危惧種・侵略的外来種の現状・生態学的特性の理解に積極的に取り組んでいる。

J-GLOBAL: 201401087879938720 ORCID: 0000-0003-1091-2313

## ●地球化学研究分野

平野 直人 / HIRANO Naoto (教授)

東北アジアの沿岸、海溝沿いに沈み込む太平洋プレートは、プレート境界型巨大地震や多くの島弧型火山を発生させている。それにもかかわらず、太平洋プレートの実体がかかってきたのはごく最近である。この科学的進展を後押ししたのは、2000年代以降の重点的な海底構造探査や、プレート境界断層層の採取、高感度海底地震観測網の構築、そしてプチスポット海底火山の発見であった。研究室ではプチスポット火山の岩石や地質から、プレート直下の深部マントル組成や太平洋プレートの構成岩を探り、新たな太平洋プレートの実体を探求している。

J-GLOBAL: 200901073369508933 ORCID: 0000-0003-0980-3929

後藤 章夫 / GOTO Akio (助教)

火山の噴火には溶岩を静かに流出するものや、火山弾や火山灰を激しく噴出する爆発的なものなど、様々なタイプがある。それらはマグマの物理的な性質、特に流れにくさを示す粘性係数が大きく影響するが、噴火時にマグマが水と接触するかといった、噴火が起こる環境も大きく関わる。私は溶岩の粘性係数が火山現象に及ぼす影響をおもに実験的手法により研究するとともに、ここ数年は仙台近郊の蔵王山と鳴子火山で、それぞれの火口湖である御釜と濁沼の活動度評価と、その地下水流動系の解明を目指した調査を行っている。

J-GLOBAL: 200901039820745770 ORCID: 0000-0001-8398-7100

## ●環境情報科学研究分野

田村 光平 / TAMURA Kohei (准教授)

ヒトを含む生物が、次世代に情報を継承する手段として、遺伝と「文化」の伝達がある。それらの相互作用——遺伝子・文化共進化——を通じた生物学的・文化的多様性の理解を目指し、現在は数理モデリングや統計解析といった定量的な方法を軸にしつつも、さまざまなアプローチで研究を進めている。同時に、個人が把握できる限界を超えた膨大なデータが蓄積されていること、学術の蓄積が困難な社会状況になりつつあることなどを踏まえたうえで、新しい理解の方法やそのための研究基盤の構築にも取り組んでいる。

J-GLOBAL: 201601003337041151 ORCID: 0000-0003-2014-5410

## 『東北アジア研究センター叢書』

東北アジア研究センターの共同研究や個人研究の成果に関する出版物。

第76号 荒武賢一朗 [著]、岩出山古文書を読む会 [編] 『吾妻家文書を読む1—岩出山伊達家の組織—』 2025



## ●上廣歴史資料学研究部門

荒武 賢一朗 / ARATAKE Kenichiro (教授)

17～19世紀日本における政治・経済の実態を明らかにしながら、社会全体の枠組みについて分析を進めている。政治史では、近世武士と領民の連携を示す地域行政機構の組織や、財政支出の具体相を明らかにしてきた。経済史においては、日本と近隣地域を含む海運のあり方を解き明かしながら広域的な商品流通に関心を持ち、その担い手である商人たちの活動を中心に都市と農村の関係にも注目している。これらの考察には、武家・商家・農家の古文書を不可欠とするが、東北地方に伝来する歴史資料の調査から、自身の研究課題への活用を試みている。

J-GLOBAL: 201201056410639911 ORCID: 0000-0002-9405-6616

根本 みなみ / NEMOTO Minami (助教)

私が主要な研究課題としているのは近世武家社会における「家」と「御家」の関係性である。近世武家社会では、大名家臣の「家」は帰属集団である「御家」に包摂され、その存続に依存したとされてきた。しかし、近年の研究では家臣も自分の「家」の存続に強い関心を持っていたことが明らかにされてきた。そこで、こうした成果を踏まえ、近世武家社会を生きた人々が自分の所属する「家」とそれが帰属する集団である「御家」の関係性をどのように意識したのか、彼らの行動や主張の中から明らかにしていきたいと考えている。

J-GLOBAL: 201901004268920227

## ●研究支援部門情報拠点分野

滕 媛媛 / TENG Yuanyuan (助教)

私の主な研究関心は、人口移動、移住(定住)意識の形成、居住環境とウェルビーイングとの関連性である。最近、私は以下の3つのテーマに重点を置いて研究を進めている。第一に、中国で活発に行われた都市開発によって土地を失った元農民世帯の都市への再定住と社会経済的状況の向上との関連性の解明である。第二に、在日外国人の居住環境とその統合との関連性の解明である。第三に、東京一極集中の問題に対応するための地方移住が促進される背景において、日本人の国内移住(定住)意識のメカニズムの解明である。

J-GLOBAL: 201901021344156924 ORCID: 0000-0002-6569-9188

## ●マイノリティの権利とメディア研究ユニット

志宝ありむとふて / Alimtohte SHIHO (特任助教)

東アジア及びイスラーム地域における哲学、政治、社会等の比較研究を学際的・総合的に行う、及びその史的展開の解明である。具体的には、東アジア地域における近代化の過程で中央アジアテュルク系ムスリム及び中国ムスリムの存在が日本・中国・欧米でどのように「再発見」され、中央アジア・中国イスラーム研究がいかんにして創始・発展してきたのかという「近代の学知としての中央アジア及び中国イスラーム研究学術史」の分野に向かっている。

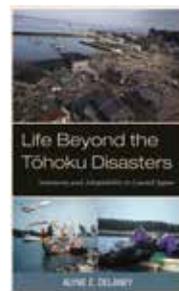
J-GLOBAL: 201701010203826652

## 『東北アジア研究専書』

専門家・知識層や大学生等を対象にした東北アジアの地域研究に関する学術専門書。2012年創刊。

第33号 荒武賢一朗、野本禎司 [編] 『仙台藩の組織と政策』 岩田書院、2025

第32号 Alyne Delaney. *Life Beyond the Tōhoku Disasters: Autonomy and Adaptability in Coastal Japan*. Lexington Press. May 2024.

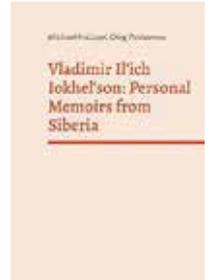


## その他の著書

・鈴木淳世 [編集・解説] 書誌書目シリーズ125『八戸書籍縦覧所関連資料 全3巻—日本最古級の図書館・八戸市立図書館の源流—』ゆまに書房、2025



・Michael Knüppel, Oleg Pakhomov. *Vladimir Il'ich Iokhelson: Personal Memoirs from Siberia*. Verlag: Books on Demand. 2024.



東北アジア研究センター地域研究デジタルアーカイブ

<https://archives.cneas.tohoku.ac.jp/>



## プロジェクト研究

ユニット名	期間	代表者
マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット	2022-2027	高倉 浩樹
「国連海洋科学の10年」対応ユニット：超学際科学を用いた漁業政策評価	2023-2025	石井 敦
地質研究資料アーカイブと試料キュレーティング	2023-2025	辻森 樹

## 共同研究

研究領域	期間	研究タイトル	代表者
環境問題と自然災害	2023-2025	鳴子火山火口湖・潟沼の火山活動調査	後藤 章夫
	2023-2027	災害時における障害者の脆弱性の研究	ボレー・セバスチャン
資源・エネルギーと国際関係	2024-2024	ローソン石エクロジャイトの年代学：低地温勾配下で変成したスラブの年齢決定	辻森 樹
移民・物流・文化交流の動態	2023-2024	更新世末から完新世初頭における環日本海の人類の移動と地域適応	鹿又 喜隆
	2023-2024	東北アジアの先史時代移行期における人類の行動変容に関する痕跡学的研究	佐野 勝宏
	2021-2024	東北大学狩野文庫所蔵朝鮮通信使関係資料の基礎的研究	程 永超
	2024-2026	琉球列島における先史時代のヒトと文化の越境	佐野 勝宏
	2024-2026	ムスリムの移動と文化の様態 —現代中国におけるムスリムマイノリティ流動人口研究—	志宝 ありむとふて
	2024-2024	東北アジアにおける経済回廊構想と辺境住民：国境貿易に注目した人類学的研究	寺尾 萌
自然・文化遺産の保全と継承	2023-2024	道東太平洋岸の地質基盤が支える独特な地形・気候・沿岸生態・地域産業とその地域普及活動	平野 直人
	2023-2025	近世東北アジアの交流と情報	荒武 賢一郎
	2024-2025	ポスト・ソ連ウズベキスタンの写真記録のデジタルアーカイブ化	磯貝 真澄
	2024-2024	微小な土壌性貝類の種多様性・遺伝的多様性に関する研究	木村 一貴
	2024-2024	地質研究標本のアーカイブに必要なメタデータ	吉田 聡
	2024-2026	山形県天童市における自治体史編纂後の歴史資料保存の実践	竹原 万雄
	2024-2026	歴史資料からみた地域社会の形成：福島県須賀川市の事例	竹原 万雄
	2024-2026	多角的な手法による地域文化研究：宮城県七ヶ浜町の事例	デレーニ・アリーン
紛争と共生をめぐる歴史と政治	2023-2026	戦争記憶の国際的比較研究	石井 弓
	2023-2024	清代モンゴル社会における自生的秩序生成に関する研究	岡 洋樹
	2023-2025	ウクライナ侵攻後のロシアからの大量出国とモンゴルにおける民族間関係	高倉 浩樹
	2024-2025	沖縄の戦没者祭祀の位相に関する人類学的研究：家における祭祀を事例に	越智 郁乃

最新の研究動向はこちら

[http://www2.cneas.tohoku.ac.jp/research/labo\\_ex/](http://www2.cneas.tohoku.ac.jp/research/labo_ex/)

